

(過去5千年)の海面変化を示す。

釧路湿原は太平洋に面した臨海湿原である。第3図は釧路湿原の鶴居で採取した堆積物のケイ藻分析の結果である。ケイ藻を海水産、汽水産および淡水産の3つに類別し、出現頻度をパーセントで示した。第3図から明らかのように、4200~3700年以前(yBP)にかけて海面低下がおき、それ以降3700~2900yBPと2900~1900yBPの2つの時期で海面が上昇した。今後の問題として、この時期の気候変化を明らかにすることである。ここではケイ藻分析という生物学的手法を用いたが、イオウ含量を使う化学的手法も有用であることがわかってきた。

引用文献

- Fortuin, J. P. F. and Oerlemans, J. (1990): Parameterization of the annual surface temperature and mass balance of Antarctica. *Annals of Glaciology*, 14, 115-119.
- Gornitz, V. and Lebedeff, S. (1987): Global sea level changes during the past century. Nummedal, D., Pilkey, O. H. and Howard, J. D. eds. "Sea level fluctu-

ation and coastal evolution." SEPM Special publication, 41, 2-16.

- Kumano, S., Ihira, S., Maeda, S., Yamauchi, M., Matsumoto, E. and Matsuda, I. (1990): Holocene sedimentary history of some coastal plains in Hokkaido, Japan: IV. Diatom assemblages in the sediments from Kushiro Moor (2). *Ecol. Res.*, 5, 221-235.
- Meier, M. F. (1984): Contribution of small glaciers to global sea level. *Science*, 226, 1418-1421.
- Pearman, G. I. and Fraser, P. J. (1988): Source of increased methane. *Nature*, 332, 489-490.
- Siegenthaler, U. and Oerchger, H. (1987): Biospheric CO₂ emissions during the past 200 years reconstructed by deconvolution of ice core data. *Tellus*, 39B, 140-154.
- Wigley, T. M. L. and Raper, S. C. B. (1987): Thermal expansion of sea water associated with global warming. *Nature*, 330, 127-131.

MATSUMOTO Eiji (1991): Research Activities on the PAGES (Past Global Changes)

<受付: 1991年6月30日>

中国の資源情報

中国、東海で2石油・ガス田を把握

<中国地質鉱産報> 1990.11.16から

上海海洋地質調査局は“第六次5ヶ年計画”の期間に東海(東中国海, 東支那海)で初めて石油・ガス田を発見したのに続いて、また新たに一つの石油・ガス田と三つの石油・天然ガス胚胎構造を発見し、差し当たって開発に供し得る石油・天然ガスの探査鉱量の調査報告を提出した。

同局は1974年に開始した調査および探鉱を基礎に、“第七次5ヶ年計画”の期間にその結果を東海の陸棚堆積盆地の重点探鉱課題と結びつけて研究を進め、石油・天然ガス地質条件の知識と資源評価の上で重要な進展が見られた。現在すでに同堆積盆地内に多くのタイプの母油岩と母ガス岩が存在し、そのうち西湖堆積凹地と欧江堆積凹地に多数の石油・天然ガス発生の中心があることが実証され、この発見にもとづいて大型・中型石油・ガス田の石油と天然ガスの集積区もしくは集積帯が確定され、“第八次5ヶ年計画”の期間に東海において大型石油・ガス田を探査するための貴重な科学的根拠が得られた。

東海における石油・天然ガスの探査を科学技術的な研究と結びつけて実施した結果は当該探査の成功率を大きく向上させ、探査の各段階を踏む周期の短縮をもたらした。“第七次5ヶ年計画”の期間に同局が重点探査区域内で施工した14井の試錐探査井のうち5井が高産油層もしくは高産ガス層に、1井が可採産油・ガス層に逢着し、残りの数井がそれぞれ油微か天然ガス徴を得た。このうちの“平湖4号井”は現在のところ、中国の海底油井・ガス井の中で正式測定産出量をもっとも多い試錐井である(産油量1,892m³/d, 産ガス量148万m³)。それと同時に、“第六次5ヶ年計画”の期間に引続く探査の中で東海最初の石油・ガス田、すなわち平湖石油・ガス田が発見・確定され、さらに1石油・ガス層胚胎構造が発見されたのにまた続いて、新たに一つの石油・ガス田と三つの石油・天然ガス胚胎構造が発見されたわけである。

全国鉱量委員会は東海初の開発に供し得る石油・ガス探査鉱量をすでに審査・承認した。技術的・経済的評価の結果によると、平湖石油・ガス田は鉱量と生産性がいづれも早期開発の要求を満たすことのできる中型石油・ガス田である。

(岸本文男訳)